

国語、哲学、歴史・地理は必修

シリーズ「国土教育」

フランスでは「哲学」が必修科目

「認識を欠いた場合、解釈できるか」「我々は幸せになるために生きているのか」「政治に関心を持たずに道徳的にふるまうことはできるか」――これらはいずれもフランスのリセ（高校）修了認証国家試験「バカロレア」の「哲学」の問題です。

中学・高校7年間必修の「歴史・地理」同時教育

フランス学校教育の特徴は、哲学に限ったことではありませんが、フランスでは「歴史」と「地理」はフランス国民としての人間形成に必要不可欠な教科目で、相互に補完しあう関係にあると認識されています。

フランスでは、リセの最終学年で哲学の授業が必修科目になり、人文系の生徒は週8時間、経済・社会系は週4時間、科学系は週3時間、職業系でも週2時間の受講が義務付けられています。哲学の授業は、初等教育以降の国語（フランス語）の授業を引き継いで、論理的に思考することを徹底的に教える場、フランス初等・中等教育の総仕上げとして位置づけられています。

その成果がバカロレアで問われるのです。哲学の試験（論述式、4時間）では、知識だけでなく明晰な判断力と論理展開の能力、それを的確に表現する能力が求められます。



フランスの歴史・地理教科書 (Hachette 社)

フランスの田園景観 (Hachette 社)



にいたる通史をゆつくり学びますが、フランス革命を含む18世紀以降のフランス及びヨーロッパを主要舞台とする近現代史は、生徒の発達段階が進んだ第4級と第3級の2年をかけて学習します。

リセでは、第2級で古代から19世紀前半までを学習し、第1級と最終級では、それ以後の近現代史を扱うプログラムとなっています。フランスの中等歴史教育は近現代史を極めて重要視しており、日本でよく聞く「授業時間が足りず、明治以降の近現代史はほとんど学習しなかった」ということは起こりません。

「景観」で始まる地理教育

フランスの地理教育では「景観 (Paysage)」が非常に重要視されます。コレージュ1年目(第6級)の学習指導要領によると、地理教育の第1テーマは「身近な空間・景観と領域」で、空間を把握する特別なツールとして「景観」が位置づけられています。

その後の学習プログラムでは学習対象を世界に広げ「都市に住む」「地方に住む」「海岸線に住む」「制約の強い地域(高温砂漠、寒冷地、高地、島)に住む」といったテーマごとに、人間社会(人の国土への働きかけの歴史)の多様

「考え、表現すること」を教えるフランスの教育

性を取り扱いますが、「景観」はそれぞれの地域の特徴を読み解く重要なツールとして機能しています。フランスの地理教育は、写真や図などに描かれた空間や景観をどのように解釈するかが学習の起点となっているのです。

ケーススタディを基軸 帰納的学習方法

フランスの地理教科書の一つの学習テーマは、「問題提起」↓「ケーススタディ(複数)」↓「基礎知識の学習」↓「基本となる地図」↓「練習問題」↓「まとめ」といった流れで構成されています。ケーススタディから一般的・普遍的な考え方を見出すという帰納的な学習方法で、体系的・網羅的な知識の習得に軸足をおく日本の地理学習の方法とは大きく異なるフランス地理教育の特徴です。

それぞれのケーススタディでは、多くのテキスト・写真・地図・統計が提示されますが、一つひとつの資料に設問があり、それに答えることで資料を読み解く力を養っていくとともに、学習テーマについて理解を深められるようになっていきます。

「クロッキー」で

課題の全体像を総体化

フランスの地理教育では、地理空間を構造的に把握することが重要視されます。バカロレアの地理では、「ブラジルの国土のダイナミズム」「空間の再構成」「ロシア」など、ある学習課題を略図(白地図)にまとめなさいという形式の問題が出題されています。ク

ロッキー (coquis) と呼ばれる地理の学習スキルで、学習課題の全体像を視覚的分かりやすい図に総体化させるものです。優れたクロッキーを作成するには、課題を正確に読み解く力、課題の説明に必要十分な知識、読み手に分かりやすく描く表現力など、かなり難易度の高い能力が求められます。

フランスの教育で重要なことは、自分で考えること、考えを論理的に相手に伝えられること、そのとき動員できる知識を身につけることなのです。

フランスには「exception française(フランス的例外)」という言葉があります。多くのフランス人は祖国を強く愛し、フランスが他国に対して「文化的な優越性」を持つと信じていますが、「フランス的例外」は、哲学や地理をはじめとするフランスの学校教育育からも大きな影響を受けているようです。

(国土学アナリスト 森田康夫)

馳せる人も多いでしょう。円空が最北の地でどまるとされるのが小幌洞窟。中にはレプリカながら数体の円空仏が祀られています。小幌駅からやや険しい山道を歩くこと20分で到達でき、350年前に円空が見た景色と変わらない原始的空間の中で、円空仏と対座できる贅沢は、他にはありません。

「秘境駅」×「円空仏」。それぞれに興味を持ちつつも、現地を訪れるまではそれぞれの魅力が小幌駅で交わるとは意識しませんでした。アメリカのS.R. ホールが提唱した消費者の行動の法則であるAIDMA(アイドマ)の法則によれば、行動心理の最初のステップは「認知段階」に始まります。今秋、小幌駅のPR活動としてのフォトコンテストが展開されているニュースに接し、道の駅の情報発信にも通用する、情報行動における「認知」の重要性を改めて実感したものです。

点描

道の駅

松波成行
「秘境駅」という言葉を耳にされたことはありますか。秘境駅は、駅の周辺には人家が希少で、中には鉄道以外でその駅にアクセスすることが極めて困難な場所もあります。

日本一の秘境駅とされる北海道の「小幌駅」を訪問したのは2年前の夏。駅を廃駅にする報道と、存続を求めるニュースが交錯し始めたころです。夏のハイシーズンの週末にも関わらず、乗降客はゼロ。確かに「秘境」を満喫できた反面、鉄道ファンだけを頼るにはあまりにも厳しい現実を肌身で感じました。

江戸時代の仏師円空と一刀彫の円空仏に魅力を